

日刊 建設工業新聞



南 泰裕

建築家、国士館大学准教授

「1」の2月に、2年半ぶりに沖縄を訪れた。今回の訪問では、琉球大学准教授で建築家の入江徹さんに現地案内をしていただき、世界遺産となっている首里城や、原広司さん設計の城西小学校などを訪れることができた。また、象設計集団による名護市庁舎・今帰仁村中央公民館や、DOCOMOMO100選にも選ばれている、近代建築の名作である聖クララ教会なども再訪し、豊かな空間を体験することができ、有意義だった。

今回は3度目の訪問というところもあり、単に沖縄建築の表面的な特徴にとどまらず、さらに一歩踏み込んで、それらが置かれている特殊な社会状況を考えさせられる機会が多かった。そのきっかけとなったのは、沖縄における、とある建築の現場見学会だった。

大規模な公共建築であるその現場見学会では、たまたま、設計者と現場監督の方々が来て下さって、その計画プロセスについて詳しくお話を伺うことができた。そのときに設計者の言葉を聞いていて、沖縄建築が置かれた特異

な状況に気づかされ、「ぞうだったのか」とハッとさせられた。

一言で言えば、沖縄の建築は、自然と社会という両次元のはざまで、不可避的に激しく引き裂かれている。そのことを、痛切に思い知らされたのである。

よく知られるように、日本の本州からはるか遠く離れた沖縄は、その大部分が亜熱帯に属した温暖地域であり、太陽高度がきわめて高い。加えて、建

自然と社会のはざまに立つ沖縄の建築

築を、もっとよく体現している。

しかし、ここはそう単純ではない。20世紀における戦争の禍根を、最も激烈に残している沖縄においては、米軍基地の存在と活動が人々の日常に隣接して、それが建築のあり方にも大きな影響を与えている。私たちが訪れた現場も例外ではなく、敷地のすぐそばに基地が立ち、航空機の爆音が大きな課題だったという。そのため、強い日差しを遮り、涼しい風を通すために

意深く見渡してみると、一見開放的に見える建築群が、実は通常の建築以上に閉鎖的に計画されているのに気づく。自然条件が要請する開放性と、社会条件が求める閉鎖性が、ぎりぎりのところで隣り合い、拮抗している。沖縄の建築は、その両義性のはざまに置かれているのである。

建築基準法上は沖縄の地震係数は例外的に小さく、一方で台風の通り道となるほどに風の影響が強いため、それらの特異な自然条件を映し込んで、日本の一般的な建築とは大きく異なる建築様式が生まれている。

かつて和辻哲郎が『風土』において、様々な文化の存在様態を「モンスーン型」「砂漠型」「牧場型」に分類したことに基づくならば、沖縄の建築は所謂した「自然環境の翻訳」としての建

開放的に作りたいにもかかわらず、主要な開口部は二重窓となっており、内壁には吸音材が至るところに張り込まれていた。それにより、内外を峻別して気密性を高める工夫が凝らされていた。「自然条件を考慮すると開放的に作りたいが、周辺状況から、それが難しかった」と述べる設計者の言葉は、沖縄における建築の両義的な困難さを物語っていた。

ある次元において最も極端な形で表象しているのだとすれば、逆に言えばそれらの建築は、今後の建築のあり方を問うための、ある種のユニバーサリティを秘めているとも言える。だとしたら、日本の周縁としての沖縄の建築は、逆に世界へと接続する、ユニークな建築的思考の可能性を有しているのではないか。

そうした視点から、沖縄の建築を注

そんなことを考えさせられた、沖縄建築の旅だった。